

名城大学電気會々誌

(題字・野口孝重先生)

— 第 64 期の歩み —

第 56 号

令和 8 年 8 月 1 日



名城大学電気会

(電気電子工学科・電気電子工学専攻)

伝統の継承と、新たな価値創造に向けて



—— 巻頭挨拶 ——

名城大学電気会 会長
小林 正彦 (S55 年卒)

名城大学電気会（以下、当会）は、本年 6 月に第 64 期を迎えました。会員の皆様には、平素より当会の活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

会員の皆様におかれましては、各地各方面においてご健勝、ご活躍のことと謹んでお慶び申し上げます。

当会は、正会員・特別会員・学生会員により構成され、役員会および代議員会を中心とした体制のもと、健全な組織運営を継続しております。令和 7 年度の新入会員を迎え総会員数は 12,369 名となりました。

昨年は、名城大学開学 100 周年を祝い、当会の積立金より 100 万円を大学へ寄付いたしました。

2025 年 7 月 18 日には、立花理事長をはじめとする大学関係者および当会役員出席のもと、目録贈呈式ならびに感謝状贈呈式が執り行われました。微力ではございますが、母校の発展に貢献できましたことを大変嬉しく思っております。

当会では、学生との交流促進及び学生の学業奨励のため、多角的な支援活動を展開しております。具体的には、9 月の卒業研究中間発表会への審査員派遣および「電気会長賞」の授与をはじめ、

修士論文・卒業研究発表における優秀者への副賞の贈呈を行っております。また、学位記授与式での祝辞や記念品の贈呈、当会主催の卒業・修了祝賀会の開催を通じて、新入会員の歓迎と門出を祝福するとともに、学科および学生会員との絆を深める活動に注力しております。

当会の目的は、会則に定められた「電気電子工学科発展への寄与」および「当会会員への貢献」にあります。この目的を達成すべく、会員各位がそれぞれの役割を分担し、日々の活動に真摯に取り組んでおります。

これらの活動記録や各種イベントの案内につきましては、電気会ウェブサイトにて随時発信しておりますので、ぜひご参照ください。

(URL : <http://www.meijo-denikikai.jp/>)

今後とも、世代や立場を超えた交流の場として、電気会がより身近で意義ある存在となるよう、役員一同努めてまいります。

引き続き、当会の活動へのご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



名城大学理工学部 電気電子工学科長

教授 村田 英一

令和 8 年度より電気電子工学科の学科長を拝命いたしました、村田英一です。

私は本学科および本研究科（修士課程・博士課程）の卒業生・修了生であり、いわゆる OB 教員として、学生時代を含めると名城大学には通算 36 年以上お世話になっております。

36 年前の名城大学には、現在のタワー 75 や北館・南館といった講義棟はまだ存在せず、電気電子工学科の講義や研究活動の多くは、鉄筋コンクリート造の 2 号館にて行われておりました。その頃から長らく親しんできた 2 号館も近年解体され、本年 3 月には跡地に大規模な体育館「LIONS アリーナ」が完成いたしました。キャンパスの景観は、私の学生時代から大きく様変わりしております。

また、本年 9 月には名城大学は開学 100 周年を迎えます。この記念すべき節目の年に学科長を拝命いたしましたことに、深い

ご縁のようなものを感じております。ご縁と申しますと、私の母が幼少期に暮らしていた場所は現在の枇杷島町であり、名城大学の前身である旧中村校舎（現・名城大学附属高等学校所在地）の周辺であったと聞いております。さらに、私と家内が初めて暮らした住まいは昭和区の「いりなか」地域の駒方町で、そこは名城大学が現在地へ移転する以前に一時期「駒方校舎」を構えていた場所でもあります。このように、名城大学とはさまざまな形でご縁をいただけてまいりました。

これまで長きにわたり名城大学から多くのご指導とご支援を賜りました。今後は学科長として、そのご恩を少しでも大学および本学科にお返しできるよう、力を尽くす所存です。

電気会の皆様ならびに OB・OG の皆様には、平素より格別のご支援を賜り、心より御礼申し上げます。今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



2025年度事業報告 (報告期間: 2025年6月1日~2026年5月31日)

会運営関連	開催日時・場所	内容
第 56 回電気会総会	2025 年 6 月 15 (日) 9 : 00 ~ 10 : 00 共通講義棟南 S40 室 出席者 17 名	議案書が審議され各議案議決を受けて全て議案通り決議された。 1. 2024 年度事業報告・会計監査結果報告 2. 2025 年度事業計画案・予算案 3. 役員・代議員選任案
第 1 回役員会	2025 年 9 月 30 日 (火) 19 : 00 ~ 20 : 00 場所: 国鉄会館・Zoom 出席役員: 7 名	審議内容 1. 秋季懇談会計画審議 2. 定例役員会日程案 3. 理工同窓会・各科同窓会行事派遣予定 - 2025 4. 理工同窓会からの要請事項 5. 各電気会 HP 改修 6. 開学 100 周年寄付実施報告
第 2 回役員会	2026 年 1 月 21 日 (水) 19 : 00 ~ 20 : 00 場所: 国鉄会館・Zoom 出席役員: 7 名	審議内容 1. 会誌発行計画 (中山副会長より資料提示予定) 審議 2. 年度末に向けた各種行事案内及び出席者相談 3. 代議員会に向けた定例資料の確認 4. その他
第 3 回役員会	2026 年 4 月 8 日 (水) 19 : 00 ~ 20 : 00 場所: 国鉄会館・Zoom 出席役員: 9 名	審議内容 1. 会誌発行計画審議 2. 代議員会・総会議案審議 3. 監査計画審議
代議員会	2026 年 5 月 8 日 (金) 19 : 00 ~ 20 : 00 場所: Zoom 出席代議員・役員: 7 名	審議内容 (総会付議事項に関する審議) 1. 2025 年度事業報告・会計監査結果報告 2. 2026 年度事業計画案・予算案 3. 役員・代議員選任案 4. 会誌第 56 号内容審議
ウェブサイト運営	通年度	電気会ウェブサイトによる情報発信・メンテナンス等の運営実施
会誌発行	通年度	年度一回発行目標にて情報整理、原稿作成、紙面配布等実施

電気会主催行事	日時・場所	内容
第 3 回電気会秋季懇談会	2025 年 10 月 25 日 (土) 14 : 00 - 17 : 30、天白キャンパス内	正会員・学生会員・特別会員 39 名にて 3 部制度で盛況裡終了
卒業研究中間発表優秀発表者表彰	//	優秀発表者 9 名に対する表彰会実施
卒業・修了祝賀会	2026 年 3 月 17 日 (火) 16 : 30 - 17 : 40	新入会員 110 名を迎えてグラン停にて開催。 総加者数 147 人 (新入会員・正会員・教員)

電気電子工学科学科関連イベント	日時・場所	内容
電気電子工学科卒業研究中間発表会	2025 年 9 月 2 日 (火)・3 日 (水) 研究実験棟Ⅲ 地下および 2 階	電気会から 3 名 (小林、竹内、福田) 審査員として参加
修士論文公聴会	2026 年 2 月 5 日 (木)	優秀発表者 3 名選出された
卒業論文発表会	2026 年 2 月 16/17 日 (月・火)	優秀発表者 9 名選出された
学位記授与式	2026 年 3 月 17 日 (火) 14 : 30 - 15 : 30	会長からの祝辞、 電気会からの卒業記念品授与、 上記優秀発表者合計 12 名に電気会から副賞を進呈

電気会外関連イベント名	日時・場所	参加会員数
校友会賀詞交歓会参加	2025 年 7 月 18 日 (金) 名古屋ガーデンパレス	4 名
名城大学開学 100 周年記念募金目録贈呈式および 感謝状贈呈式	2026 年 2 月 8 日 (日) 名城大学天白キャンパス 本部棟 5 階 第一会議室	5 名
沖先生の秩父宮山岳賞受賞を祝う会	2026 年 2 月 20 日 (金) レストランリビエール	2 名
環境会 20 周年記念式典／第 11 回懇親会	2026 年 2 月 22 (日) アイリス愛知	1 名
緑風会主催理工学部退職者送別会	2026 年 3 月 12 日 (木) タワー 75 レセプションホール	2 名



2026年度事業計画 (期間：2026年6月1日～2027年5月31日)

会運営関連	開催日時・場所	内容
第 57 回 電気会総会	2026 年 6 月 14 (日) 9 : 00 ~ 10 : 00 共通講義棟南 S40 室	議案書が審議され各議案議決を受けて全て議案通り決議された。 1. 2025 年度事業報告・会計監査結果報告 2. 2026 年度事業計画案・予算案 3. 役員・評議員選任案
卒業研究中間発表会	2026 年 8 月下旬予定	卒業研究中間発表会への審査員として参加、電気会会長賞の選任支援
第 4 回 電気会秋季懇談会	2026 年 10 月下旬予定	新春懇談会含む通算第 28 回目
修論・卒業研究発表会の聴講	2027 年 2 月予定	学生会員支援・学科への協力
電気電子工学科学学位記授与式 卒業・終了祝賀会	2027 年 3 月中旬	学生会員支援・学科への協力
会運営	役員会：年度 3 回程度 評議員会：年度 1 回	会運営に必要な議案審議と決議
ウェブサイト運営	通年度	電気会ウェブサイトによる情報発信・メンテナンス等の運営実施
会誌発行	通年度	年度一回発行目標にて情報整理、原稿作成、紙面配布等実施

2025年度会計報告・2026年度予算計画

第57回 電気会総会 第2号議案 決算報告 2025 (令和7) 年度 収支報告書 (2025年4月1日～2026年5月31日)

一般会計 (単位：円)			
収入の部			
科目	予算	実績	差異 (対予算)
前年度繰越金	4,549,852	4,549,852	0
入会費	1,470,000	1,100,000	△ 370,000
賛助会員費	0	0	0
受取寄付金	300,000	309,900	9,900
雑収入	1,000	1,033,436	1,032,436
合計	6,320,852	6,993,188	672,336

支出の部 (単位：円)			
科目	予算	実績	差額 (対予算)
行事費	800,000	650,525	△ 149,475
会議費	100,000	49,479	△ 50,521
消耗品費	20,000	0	△ 20,000
通信費	50,000	29,037	△ 20,963
WEB サイト運営費	150,000	178,805	28,805
会誌作成発行費	100,000	98,989	△ 1,011
学生会員支援費	450,000	418,311	△ 31,689
慶弔費	0	0	0
寄付	0	1,000,000	1,000,000
予備費	600,000	0	△ 600,000
積立(定額預金)開学110周年記念寄付用	0	0	0
積立(定額預金)慶弔費用	100,000	100,000	0
小計	2,370,000	2,525,146	155,146
次年度繰越金	3,950,852	4,468,042	517,190
合計	6,320,852	6,993,188	672,336

特別会計	
定額預金内訳	積立累積額
慶弔・退職御祝金	438,000

第57回 電気会総会 第5号議案 予算案 2026 (令和8) 年度 予算書案 (2026年6月1日～2027年5月31日)

一般会計 (単位：円)		
収入の部		
科目	予算	差異 (対前年度)
前年度繰越金	4,468,042	△ 81,810
入会費	1,460,000	△ 10,000
賛助会員費	0	0
受取寄付金	300,000	0
雑収入	439,000	438,000
合計	6,667,042	346,190

支出の部 (単位：円)		
科目	予算	差額 (対前年度)
行事費	800,000	0
会議費	50,000	△ 50,000
消耗品費	20,000	0
通信費	30,000	△ 20,000
WEB サイト運営費	150,000	0
会誌作成発行費	80,000	△ 20,000
学生会員支援費	450,000	0
慶弔費	50,000	50,000
寄付	0	0
予備費	500,000	△ 100,000
積立(定額預金)開学110周年記念寄付用	100,000	100,000
小計	2,230,000	△ 140,000
次年度繰越金	4,437,042	486,190
合計	6,667,042	346,190

特別会計	
定額預金内訳	積立累積額
開学 110 周年寄付金用	100,000



2026年度 役員・顧問・代議員名簿

役員 15 名 (区分：重＝重任，再＝再任，新＝新任，留＝留任) (修了年：予＝予定)

役名	区分	氏名	卒業年	修了年	役名	区分	氏名	卒業年	修了年
名誉会長	新	村田 英一	H6	H12	監事	重	木全 能之	S53	-
会長	留	小林 正彦	S55	-		重	川浦 久幸	S61	-
副会長	企画	重	竹内 正明	S57	-	重	開米 和明	S47	-
	広報	新	福田 高久	H21	H23	重	佐藤 一彦	S51	-
	総務	重	中田 和弥	H22	H24	重	岩田 和久	S58	-
	会計	重	鬼頭 優斗	H25		重	市川 孝博	S59	-
学内幹事	重	村上 祐一	H24	H29	学生幹事	新	辻 美帆	R8	R10 (予)
						新	水谷 東星	R8	R10 (予)

顧問 1 名

顧問	重	伊藤 公一	S60	-
----	---	-------	-----	---

評議員 73 名

No.	区分	氏名	卒業年	修了年	No.	区分	氏名	卒業年	修了年	No.	区分	氏名	卒業年	修了年
1	重	山崎 初夫	S46	-	26	重	後藤 大輔	H18	-	51	重	野間 大和	R2	-
2	重	加藤 昇	S49	-	27	重	竹田 有希	H20	-	52	重	安原 千絵	R2	-
3	重	伊藤 和彦	S51	-	28	重	加藤 秀行	H21	-	53	重	敷島 惇也	R2	R4
4	重	加藤 潤二	S52	-	29	重	古川 智也	H22	H24	54	重	柴田 紗季	R3	-
5	重	外山 泰裕	S53	-	30	重	石田 高史	H23	H25	55	重	金森 舜右	R3	-
6	重	中田 光龍	S53	-	31	重	坂野 豊	H24	H26	56	重	藤井 春樹	R3	-
7	重	岡村 浩一	S55	-	32	重	杉本 昌駿	H25	-	57	重	伊与田友貴	R3	R5
8	重	榊原 理浩	S55	-	33	重	清田 享稔	H25	-	58	重	加藤 大輔	R3	-
9	重	渡邊 典保	S56	-	34	重	田中 優太	H28	H30	59	重	若菜 文佳	R4	-
10	重	加藤 誠治	S56	-	35	重	水野 翔太	H28	H30	60	重	山本ヒロミツユキ	R4	R6
11	重	市川 広樹	S59	-	36	重	高橋 真央	H29	-	61	重	榊原 幹人	R5	-
12	重	横井 真則	S59	-	37	重	木下 雅裕	H29	-	62	重	大前 知輝	R5	R7
13	重	沢田 昭人	S60	-	38	重	佐藤 弘輝	H30	-	63	重	杉山悠一朗	R5	R7
14	重	森川 英二	S60	-	39	重	岡部 萌	H31	-	64	重	森井 柊二	R5	-
15	重	山口祐一郎	S63	-	40	重	木野 裕也	H32	-	65	重	瀧澤 祐也	R5	-
16	重	川端 秀昭	S63	-	41	重	鈴木 浩華	H30	-	66	重	藤掛 大貴	R6	R8
17	重	川村 裕一	H2	-	42	重	山下 恭平	H30	-	67	重	光岡日菜子	R6	R8
18	重	二之部昭司	H2	-	43	重	松月 大輔	H30	-	68	重	清水 健太	R7	R9
19	重	矢部 陽一	H3	-	44	重	徳永 将典	H30	-	69	重	横井 悠人	R7	R9
20	重	浅井 覚	H4	-	45	重	中村 将之	H30	-	70	新	一柳 涼太	R8	R10 (予)
21	重	長谷川祐一	H5	-	46	重	岩田 直幸	H30	-	71	新	奥村 空	R8	-
22	重	野口 健二	H7	-	47	重	梅村 和輝	H31	-	72	新	山形 啓介	R8	R10 (予)
23	重	金沢 宮孝	H10	-	48	重	堀 侑己	H31	-	73	新	横山 麗王	R8	R10 (予)
24	重	田邊 祥隆	H10	-	49	重	村上 和史	H31	-					
25	重	福島 元彦	H13	-	50	重	北崎 竜也	R2	R4					

監 査 報 告

(報告期間 2025 年 4 月 1 日～2026 年 5 月 31 日)

名城大学電気会の事業運営について、ウェブサイト、会誌および書類による審査を行った結果、役員の業務執行に関して適性であることを認める。また、諸帳簿の記載、現金、貯金等の額に誤りが無いことを確認した。会計の運用についても、全面的に良好であることを認める。以上の結果、本会の業務執行および財産管理は適正であることを認める。

2026 年 6 月 10 日

監査人 川浦 久幸



監査人 木全 能之





学科からの紹介

新任教員のご紹介

～学科の未来を拓く、お二人の新任教授からのメッセージ～

電気電子工学科 教授 今宿 亙



2025 年 4 月 1 日より着任いたしました今宿亙と申します。出生は浜松市ですが、父の仕事の関係で大垣、岡山、兵庫と所在を転々としました。その後、千葉大学工学部電気工学科に進学、同大学院修士課程修了後の 1994 年 4 月から日本電信電話（現 NTT）（株）での勤務

となり、22 年間、本社やグループ会社で過ごしました。その間に基礎研究、商用化開発、国際標準化、海外事業子会社経営と幅広い機会を頂き、厳しくも楽しい日々を過ごしてきましたが、残り半分の社会人生活では、中途半端になっていた研究に取り組みたいと考えるようになり、2016 年 4 月に大学教員として近畿大学に転身しました。

私自身の研究履歴は、「光」を中心に光半導体デバイス（学生時代）から超低雑音光信号増幅技術（20 代）、光ネットワーク方式（特に光ネットワーク高信頼化制御技術）（30 代前半）を含んでいます。後者の光ネットワーク高信頼化制御技術の研究成果の一部は、国際標準や商用システムに採用され、微力ながら社会の下支えとなっています。一方、20 代で取り組んできた超低雑音光信号増幅技術は、量子光学的なアプローチを取りつつ非

線形光学材料を用いるもので、自身の研究としては運よく一定の成果が得られたものの、現代においても社会実装は実現していない状況です。当時、企業人としてのキャリア形成面でご心配を頂き、研究テーマの変更を勧めてこられた上司の先見性には頭が下がります。一方、近年は、量子暗号通信技術や量子光計算技術が台頭し、その中で超低雑音光信号増幅技術が再び注目されてきています。

名城大学では、前述の量子系の研究テーマにじっくり取り組みつつも、機械学習や量子アルゴリズムの光通信システムへの応用に取り組んでいきたいと考えております。名城大学は、OB の皆様方、長年にわたる先輩教職員の皆様方のご尽力により、有力私学として確固たる地位を築いております。微力ながら、自身の教育研究を通じて、一人でも多くの産業界に貢献できる有為な人材を輩出し、本学の発展に貢献できるよう、自己研鑽を積んで参りたいと考えております。特に東海エリアの要である自動車産業にも、電動化、自動運転、SDV と、ICT 化の大波が押し寄せています。光ファイバ通信技術は、車載ネットワークインフラにもなります。何卒、ご指導ご鞭撻の程、お願い申し上げます。

電気電子工学科 教授 岡田 啓



2025 年 4 月 1 日付で名城大学理工学部電気電子工学科の教授として着任いたしました岡田啓と申します。出身は愛知県でして、名古屋大学工学研究科電子情報学専攻にて博士（工学）を取得後、助手として採用されるまで、愛知県に在住しておりました。その後、新潟大学・

助教授、埼玉大学・准教授として採用されたのにもとない、名古屋を離れることになりました。2011 年に名古屋大学に准教授として赴任してから、再び愛知県に住んでおります。このたび、長年にわたり研究・教育に携わってきた通信分野において、新たな環境で教育・研究活動に取り組めることを大変光栄に感じております。

携帯電話、無線 LAN、衛星通信といった無線通信システムについて、効率良く情報を伝送するための信号処理技術、複数のユーザで無線資源を共有するための無線アクセス技術などについて、理論から実験まで幅広く研究しています。実環境を想定したシステム設計や実証実験などについても、研究を進めてまいりました。地震などの大規模災害が発生したときにドローンを用いて上空に一時的な通信ネットワークを構築する技術や、デジタルサイネージなどのディスプレイとスマートフォンのカメラを使った可視光

通信についても研究しています。名城大学では、機械学習・深層学習といった AI を用いた通信システムや次世代の移動体通信（携帯電話）である Beyond 5G / 6G についても取り組んでいます。これらの研究を通じて、社会に役立つ通信技術の実現に貢献していきたいと考えております。

講義は基礎通信工学、情報理論、デジタル回路 1 といった情報・通信系の科目を担当しております。学生の皆さんには、基礎理論の理解に加え、実際の通信システムへ応用する力を身につけてもらえるよう、丁寧な指導を心がけてまいります。また、研究室においては、自ら課題を見つけ主体的に取り組む姿勢を重視し、議論を通じて理解を深める教育を実践していきたいと考えております。

名城大学においても、これまでの経験を活かし、教職員の皆様や関係各位と連携しながら、研究、教育のさらなる発展に貢献していく所存でございます。まだ至らぬ点も多いかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



研究室紹介

電子物性・デバイス研究室 教授 竹田 圭吾

プラズマを用いたモノづくり（プラズマプロセス）技術は、メモリやICなど半導体デバイス製造をはじめ、社会の更なる発展をもたらす新材料の開発を実現する重要な技術となっています。本研究室では、その“プラズマを知り、操ること”を目的に、それら粒子の表面反応を科学的に明らかにし、制御する、高度なプラズマモノづくり技術の実現と応用に関する研究を行っています。以下に、研究内容の一部を紹介します。

①プラズマプロセスは、プラズマによって原料ガスを分解し生成される原子やラジカルといった反応性の高い中性活性粒子に加え、イオンや電子など荷電粒子による基材上での表面反応によって実現されます。竹田研究室は、それら活性粒子の反応や、イオンなどの荷電粒子の影響など、プラズマ内の各粒子の計測・分析を実施し、各粒子による表面反応の理解をベースに高精度・高度なプロセス技術の開発を行っています。例えば、イオンなど荷電粒子が常に降り注ぐ実プロセス表面での原子状ラジカルの反応性（表面で反応する確率：表面損失（反応）確率）を、荷電粒子種による影響の違いや、フラックス・エネルギーを基軸として分析

し、さらに比処理基材の種類（構成する元素、組成）や表面状態（構造、温度、分子吸着状態など）による影響を調査するなど、プラズマ粒子反応の定量的な知見の集積を行っています。

②現在、カーボンニュートラル実現に向け、CO₂を排出しないゼロエミッションシステムの実現が強く求められています。竹田研究室は、CO₂を原料とした人工光合成やアルコール合成などCO₂の再資源化（物質変換技術）のために使用される触媒およびその反応の更なる高効率化を目指した研究を実施しています。CO₂の物質変換などに利用される触媒反応では、分子の振動温度（エネルギー）が、分子変換の活性化エネルギーを減少させることが知られています。この活性化エネルギーの減少は、反応効率の向上をもたらし、反応プロセスの低温化が可能です。そこで特定のエネルギ状態への分子励起（加熱）技術の実現に向け、本研究室ではプラズマを用いたガス分子の励起・分解反応を従来の触媒反応系に組み込み、これまでにない高い反応性を実現するプラズマ触媒反応系の実現を目指した研究を実施しています。



卒業生に聞く

株式会社アイシン 加藤 寛人

平成24年(2012年)卒、平成26年(2014年)修士課程修了

「大学での経験を、社会でどう活かしているか」



私は2013年に名城大学電気電子工学科の修士課程を修了し、現在は株式会社アイシンに勤務しています。本稿では、学生時代の経験から現在の仕事に至るまでを振り返り、OBの皆さまには近況報告として、また後輩の皆さまには今後の進路を考える際の一助としてお読みいただければと思います。

大学時代を振り返ると、最も印象に残っているのは、「単位を落とさないこと」と「実験レポート」に追われていた日々です。当時は必須の専門科目が2、3年次に集中しており、実験結果のレポート作成も重なったため、非常に忙しい毎日を送っていました。また、当時からプログラミングは得意とは言えず、授業や研究で必要になるたびに苦労していました。理解が追いつかず悩むことも多くありましたが、現在では生成AIを活用することで手軽に扱えるようになり、むしろ楽しさを感じるまでになっています。

卒業研究および修士課程では、伊藤・太田研究室に所属し、大気圧プラズマを用いた殺菌技術の研究に取り組みました。当時の研究室は立ち上げ段階にあり、設備も十分とは言えず、段ボールの中に機材が保管されているような環境でした。そのため、研究設備の整備や研究の進め方など、研究そのものの以外の部分にも主体的に関わる必要があり、「研究室を立ち上げる」という貴重な経験を得ることができました。

また、研究室の先輩が少なかったことから、名古屋大学の先輩方にご指導いただく機会も多くありました。学外の方と積極的に議論しながら研究を進めるという、やや特殊な環境ではありましたが、さまざまな立場や考え方に触れ、多くの人と関わりながら物事を進める力を養うことができました。この経験は、社会人となった現在も、社内外を問わず多くの人と連携する場面で大いに

役立っています。

修士課程修了後は、当時のアイシン精機株式会社に入社しました。売上の大部分が自動車部品であったことから、自動車関連部署への配属を想像していましたが、実際には民生機器の開発部門に配属され、ミシンやシャフトイレなどの製品開発に携わりました。電子回路設計や評価を中心に、製品としての品質や信頼性を意識したモノづくりを学びました。

現在は新規事業を担当する部署に異動し、事業の立ち上げや、それに必要となる技術の基礎研究に取り組んでいます。社内にとどまらず、複数の大学と共同研究を行いながら、新しい技術や知識を吸収する日々です。これまでの業務では電子回路設計や評価が中心でしたが、新規事業では製品全体の構成検討や原価の考え方など、電気知識以外の分野にも踏み込む必要があり、日々試行錯誤しています。

アイシンは、「『移動』に感動を、未来に笑顔を。」という経営理念のもと、モビリティを中心に幅広い分野で事業を展開しています。詳細な事業内容については公式ホームページをご覧くださいと思いますが、私自身もこの理念を常に意識しながら、新たな価値創出に挑戦しています。

入社から約12年の間に、働き方や技術環境は大きく変化しました。コロナ禍をきっかけに業務はWeb中心となり、現在では生成AIを業務にも積極的に活用し、調査や資料作成の効率化を進めています。一方で、私は「現地・現物・現認」を大切に、実験や現場で得た実感や生の声を基に、それを補完・加速させる手段としてAIを活用することが最も効果的だと感じています。

学生時代に経験した苦労や、人とのつながりを大切にする姿勢は、技術や環境が変化しても変わらず役立っています。後輩の皆さんも、目の前の課題に真摯に向き合いながら、自分なりの経験の一つひとつ積み重ねていってください。

第3回名城大学電気会秋季懇談会の報告 (新春懇談会含む通算第28回)

日時：令和7年10月25日(土) 14:00～17:30

場所：名城大学天白キャンパス

内容

第1部 電気電子工学科見学会 (14:00～14:50)

1. 村本・村上研究室
2. 学生実験室、児玉研究室
3. 田崎研究室

第2部 講演会 (15:00～16:00)

1. 名城大学電気電子工学科教授 今宿互 先生
演題「光ファイバー通信ネットワークのさらなる高度化を目指して」
2. 名城大学電気電子工学科教授 岡田啓 先生
演題「山間部におけるドローンを用いた自営ネットワーク」

第3部 懇親会 (16:15～17:30)

式次第

- 一、開会の辞（竹内副会長）
- 一、電気会会長挨拶（小林会長）
- 一、電気電子工学科長挨拶（熊谷学科長）
- 一、乾杯（中山副会長）

歓談

- 一、卒業研究中間発表会優秀発表者表彰式
- 一、閉会の辞（児玉理工学部長）

※参加者 39名

正会員：8名、役員：8名、

特別会員：10名（教員9名、教員OB1名）

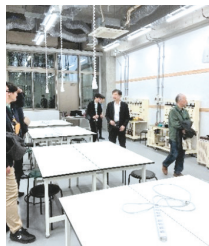
名城大学は2026年に開学100周年を迎えます。多くの会員が通った2号館の跡地には本学の新たなシンボルとなる「名城大学開学100周年記念アリーナ（愛称：LIONS ARENA 2026）」が2026年3月完成予定で建設中の中、本年の電気会秋季懇談会は、変革を遂げる本学を肌で感じていただくため電気電子工学科の学生が学ぶ研究実験棟Ⅲの見学、共通講義棟東での講演会、タワー75での懇親会など天白キャンパス内で開催しました。ご参加いただいた方には感謝を申し上げます。

第1部 電気電子工学科見学会

村本・村上研究室、田崎研究室、児玉研究室及び学生実験室を見学させて頂きました。ご案内頂きました先生方に感謝申し上げます。



村本・村上研究室



学生実験室、児玉研究室



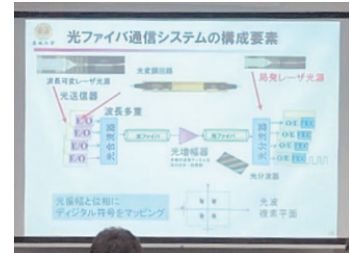
田崎研究室

第2部 講演会

第2部では、共通講義棟東E-204にて、R7年度着任された電気電子工学科教授 今宿互先生、電気電子工学科教授 岡田啓先生に講演を頂きました。

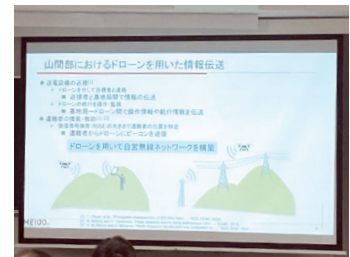
1. 今宿互 先生

「光ファイバー通信ネットワークのさらなる高度化を目指して」



2. 岡田啓 先生

「山間部におけるドローンを用いた自営ネットワーク」



第3部 懇親会

第3部はタワー75レセプションホールでの懇親会です。竹内電気会副会長による開会の辞に始まり、小林電気会会長、熊谷学科長と挨拶が続き、中山電気会副会長の乾杯の音頭により、会食、懇談に入りました。

途中、卒業研究中間発表会優秀発表者表彰式を9名の学部4年生を招き表彰式を行い、学生の皆さんには自己アピールをしていただきました。



熊谷学科長より賞状を、小林電気会会長より副賞を一人一人に手渡されました。

閉会の辞は、児玉理工学部長により締めの挨拶をいただきました。



2025 年度 電気電子工学科 卒業研究中間発表会

日時：2025 年 9 月 2 日（火）、9 月 3 日（水）

場所：名城大学 天白キャンパス 研究実験棟Ⅲ B1、2F

2016 年より、電気会と電気電子工学科との共催で実施されている卒業研究中間発表会も、今年で 9 年目となりました。本年度は、9 月 2 日（火）・3 日（水）の 2 日間実施され、電気会からは、小林、福田、竹内の 3 人が審査員として参加しました。

年々研究の幅が広くなり、AI の利用なども進み、研究方法も時代に即して進化していると感じました。

発表会は例年同様、発表者（学部 4 年生と修士 2 年生）が作成し掲示されたポスターの前で、発表者による随時説明と質疑応答が行われるというものです。そのうち学部 4 年生の中から優秀者 9 名を選出、10 月 25 日（土）の電気会秋季懇談会にて表彰式を行い電気会からは、電気会長賞として記念品を贈呈しました。

研究内容は多岐にわたり、リチウムイオン電池の電気自動車、航空機などへの応用、ラジカル活性化インドール溶液を用いた殺菌技術は、農業への応用が期待され、次世代の電子デバイスで注目されている Si ナノワイヤー、未来の電極材料としての導電性ダイヤモンドなどは、新たな素材として、環境負荷の低減や様々な分野への応用の可能性を感じました。

この発表会を通じて、学生の皆さんの研究に真摯に向き合う姿勢、またプレゼン能力の高さと、今後更なる成長が期待されると感心させられました。

優秀発表賞 受賞者一覧

1. 辻 美帆（熊谷研究室）
「大気圧プラズマによるマウス萌芽細胞 C2C12 の成長制御の検討～弾性へ及ぼす影響～」
2. 一樹 涼太（平松研究室）
「3 次元グラフェンを用いたリチウム硫黄電池用正極材料に関する研究」
3. 岡澤 歩美（平松研究室）
「導電性ダイヤモンドの電極応用に関する研究」
4. 尾崎 海里（堀田研究室）
「Siamese Diffusion と Segmentation Network の敵対的学習による腫瘍セグメンテーション」
5. 小林 将也（竹田研究室）
「窒化炭素と金属酸化物を用いたヘテロ半導体材料の合成と光触媒の応用」
6. 横山 麗王（内田研究室）
「Si ナノワイヤー負極の低温製作と Li イオン電池評価」
7. 奥村 空（内田研究室）
「全固体電池用 $\text{Li}_{1.3}\text{Al}_{0.3}\text{Ge}_{1.7}(\text{PO}_4)_3$ 、 $\text{Li}_{1.3}\text{Al}_{0.3}\text{Ti}_{1.7}(\text{PO}_4)_3$ 電解質ペレットのイオン伝導率の焼結温度依存性」
8. 山形 啓介（田崎研究室）
「移動体領域を考慮した三次元地図による単眼カメラ画像からの自己位置推定」



2025年度 電気電子工学科 学位記授与式 電気会主催 卒業・修了祝賀会

今年度の卒業式は、昨年度まで行われていたドルフィンズアリーナ（愛知県体育館）から場所を移し、名城大学開学 100 周年記念アリーナ（LIONSARENA）にて、続いて天白キャンパス内にて電気電子工学科の「学位記授与式」が行われました。その後に電気会主催の「卒業・修了祝賀会」を開催しました。

<学位記授与式>

日時：2026 年 3 月 17 日（火）14 時 30 分～16 時

場所：名城大学 共通講義棟東館 E304

今年度は、学部卒業生 148 名、修士修了生 45 名の皆さんに学位記が授与されました。式典は熊谷学科長の祝辞に続き、丹羽理工学部後援会会長、小林電気会会長より祝辞が送られ、各種表彰のうち、修士・卒業論文発表会において優秀論文発表賞（修士・学士）を受賞した修士修了生 3 名、学部卒業生 9 名には、電気会より、副賞（図書券）を、また卒業生全員に卒業記念品（マグカップ）を贈呈しました。表彰式終了後、熊谷学科長より、修了生、卒業生一人一人に学位記が手渡されました。



<修了・卒業祝賀会>

日時：2026 年 3 月 17 日（火）16 時 30 分～18 時

場所：名城大学 6 号館 1 階グラン亭

学位記授与式の後には、グラン亭にて恒例の卒業・修了祝賀会が開催されました。熊谷学科長の挨拶により、和やかな雰囲気での祝賀会が進められました。電気会からは、小林、福田、竹内の 3 人が出席しました。



2025年度 優秀発表賞 受賞者

修士論文公聴会

発表者	所属研究室	題 目
川崎 祐輔	村田研	TiN コーティングを施したボルケーノ構造 FEA の 1tip エミッション電流の定量評価手法の提案と考察
北川 大慈	伊藤研	酸素ラジカル活性化トリプトファン溶液の殺菌メカニズムに関する研究
光岡日菜子	堀田研	効果的な損失設計による時系列行動セグメンテーションの精度向上

卒業研究発表会

発表者	所属研究室	題 目
一柳 涼太	平松研	リチウム硫黄電池正極応用を見据えた3次元グラフェンへの硫黄導入に関する研究
白村 人路	増山研	並列化環境での強化学習のための follower 方策の多様化
前川 英義	竹田研	ヘマタイト光触媒のエネルギー効率向上に向けたプラズマ処理
山本 智崇	内田研	スパッタリングによる SiAg 表面構造膜制御とリチウムイオン電池負極応用
熊谷 奏汰	竹田研	プラズマ化学気相堆積法によるシリコン基板上へのダイヤモンド薄膜成長のための基板表面処理
倉田 天真	堀田研	自己回帰型画像生成モデルにおける推論時介入を用いた誤り検知と訂正
山口 晃儀	内田研	層状 SnS_2 のナノウォール構造作製と Li イオン電池への応用
森 北斗	伊藤研	酸素ラジカル活性化インドール溶液中の長寿命殺菌物質の推定
横山 麗王	内田研	基板温度による SiSn ナノワイヤー負極の構造制御と Li イオン電池応用

2025年度 修士論文紹介

学籍番号	200442042	氏 名	川崎 祐輔	指導教員名	村田 英一
題 目	TiN コーティングを施したボルケーノ構造 FEA の 1tip エミッション電流の定量評価手法の提案と考察				

1. まえがき

電フィールドエミッタは、針状陰極の先端に電界が集中し、量子力学的な透過現象であるトンネル効果を介して電子を放出する電子源である。このようにして得られる電子ビームは、高輝度・狭いエネルギー幅・高速応答性を有するため、電子顕微鏡や電子線リソグラフィなどに広く利用されている。なかでも、微小なフィールドエミッタを多数配列した素子はフィールドエミッタアレイ（以下、FEA）と呼ばれる。現状 FEA は、動作不安定性（電流のゆれ）および多数あるエミッタ特性の不均一性が主要な課題として挙げられる。これは半導体微細加工上発生する問題であり、この FEA の特性理解を深めるためには個々のエミッタについての検証が必須である。我々の測定システムは電子光学系を有し、従来では放出パターンを分解することが困難であった数マイクロメートル以下のエミッタ間隔を持つ高密度 FEA においても正確な電流測定を可能とする。またエミッタ個々の放出強度をリアルタイムかつその場観察が可能であるため、FEA の動作中に任意のエミッタ 1tip を選択・解析できるといった強みがある。個々のエミッタ 1tip からの電流は、制限視野絞り、回折絞りとファラデーカップを用いて測定した。ただし、光軸上のいくつかの絞りにより放出電流が制限される。そこで本研究では、エミッタ 1tip からの実際のエミッション電流を算出する手法を提案する^[1]。この手法を用いて、FEA に表面処理を施し面内放出電流の不均一性および電流変動特性の改善効果について、定量的な評価を行った。

2. 評価方法と測定例

評価したサンプルは、TiN コーティングを施したボルケーノ構造 Si-FEA^[2]（図 1 (a) 参照） $10 \times 10 = 100$ tips（間隔 $5 \mu\text{m}$ ）である。この FEA をマルチエミッタ評価装置^[3]に導入して評価する。本装置の光電子顕微鏡（PEEM）と電界電子顕微鏡（FEEM）モードを用いて評価を行った。PEEM モードは光電子により Screen 上にサンプル表面の拡大像を結像する。一方、FEEM モードはサンプルのゲートに電圧 V_g を印加し、電解放出電子による放出パターンの拡大像を得る。図 1 (b), (c) は、それぞれ、PEEM 像と FEEM 像を示す。

ここで計測できる電流値は、パルス駆動と装置内の絞りを通過したものであるため、実際の電流値より小さく計測される。そこで、制限視野絞りを全開にした場合の「全 100 tip のプローブ電流」と制限視野絞りにより視野を 1 tip に制限した「エミッタ 1 tip のプローブ電流」の割合から 1 tip の実際のエミッション電流値を算出できる。図 1 (d) に 100 tips の全放出電流（黒線）と 1 tip の放出電流（赤線）の測定例を示す。

3. まとめ

電子光学系を有する装置を用いて、TiN コーティングボルケーノ構造 FEA を PEEM

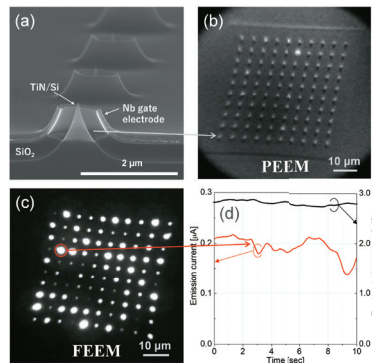


FIG. 1. (a) Cross-sectional SEM image of a single-tip volcano-structured FEA, (b) PEEM image, (c) FEEM image, and (d) Typical examples of single-tip and total current at $V_g = 50 \text{ V}$ as a function of elapsed time.

+FEEM モードを用いて評価した。このシステムでは、測定された電流は実際の全エミッション電流ではなく、光軸に沿って配置されているいくつかの絞りにより、放出電流が制限される。これに対処するため、任意に選択したエミッタ 1 tip のエミッション電流を測定する手法を提案した。これで得られたエミッタ 1 tip の FN プロットは直線関係を示し、この傾きを利用してエミッタの先端曲率半径を算出^[4]することで提案された方法の有効性を確認した。この手法を用いることで、約 $20 \mu\text{m}^2$ 以下の微小面積から放出される電流の測定が可能となった系電気絶縁油内の水分量は減少し、交流絶縁破壊強さも向上することが示された。

4. 参考文献

- [1] Y. Kawasaki, H. Murata, H. Murata, M. Nagao, J. Vac. Sci. Technol. B 44, 013201 (2026).
- [2] H. Murata, K. Murakami, and M. Nagao, J. Vac. Sci. Technol. B 42, 013203 (2024).
- [3] H. Murata, K. Sakai, D. Tsubaki, H. Shimoyama, K. Sakemura, N. Negishi, and A. Watanabe, e-J. Surf. Sci. Nanotechnol. 8, 266 (2010).
- [4] H. Murata, T. Ohye and H. Shimoyama, Proc. SPIE 4510, 107 (2001).

2025年度 卒業研究紹介

学籍番号	220442069	氏 名	白村 人路	指導教員名	増山 岳人
題 目	並列化環境での強化学習のための follower 方策の多様化				
Title	Follower Policy Diversification for Reinforcement Learning in Parallel Environments				

1. まえがき

近年、GPUを用いた物理シミュレータの発展により、大規模な並列環境を用いた強化学習が可能となっている。しかし、Proximal Policy Optimization(PPO)に代表される強化学習(図1:左図)では、同一方策を多数の環境で並列実行するため、行動の多様性が低く、並列化の恩恵を十分に活かせないという問題がある。

この問題に対し、Split and Aggregate Policy Gradients(SAPG)は、並列化された環境を複数のブロック(follower)に分割し、それぞれで異なる方策を学習することでデータの多様性を確保する手法である^[1](図1:右図)。SAPGでは各followerで得られた経験をleader方策に集約することで高い性能を達成している。一方で、follower間の探索の度合いは固定的であり、方策多様性の制御については十分に検討されていない。

そこで本研究では、KLダイバージェンスを用いてfollowerごとの探索力を制御し、follower間の方策多様性を向上することで学習性のさらなる改善を図る。

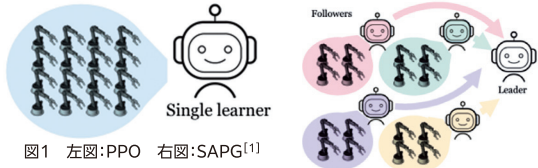


図1 左図:PPO 右図:SAPG^[1]

2. 提案手法

本研究では、SAPGにおけるfollower方策に着目し、方策更新時の探索度合いを制御する。探索力の指標として、更新前後の方策分布の差を測るためにKLダイバージェンスを用いる。状態sにおける更新前方策 π_{old} と更新後方策 π のKLダイバージェンス $D_{KL}(\pi_{old} \parallel \pi)$ の値が大きいくほど、更新前の方策を基準として更新後の方策が大きく変化するため、探索的な更新が促進することが期待できる。本研究では、KLダイバージェンスを用い、followerごとにKLダイバージェンスに対する係数を変えることで、方策更新の変化量に差を与える図1実験方法の模式図

3. シミュレーション結果と考察

物理シミュレータIsaac Gymのタスク(Allegro Kuka Regrasping, Allegro Kuka Reorientation)を用いたシミュレーション結果を表1に示す。シミュレーションは6144環境合計して1,000,000,000ステップで5回実施した。評価は1,000,000,000ステップ到達時の平均報酬値と標準偏差とした。表ではスコア上位2つを太字で示す。本研究ではfollower間に方策更新の変化量に差をもたせた

め、5体のfollowerに対して0.1, 0.2, 0.3, 0.4, 0.5の倍率をそれぞれ固定で割り当て、シミュレーション条件として設定した定数(0.001, 0.1, 1.0)を全followerそれぞれの倍率に掛けることで、各followerのKLダイバージェンスに対する係数とした。

表1から、RegraspingタスクではKL_0.001およびKL_1.0の条件でSAPGを上回る性能が得られた。一方、ReorientationタスクではKL係数の増加に伴い性能が向上し、KL_1.0の条件が最も高い報酬値を示した。このタスクでは状態空間が広く、多様な姿勢や回転方向を探索する必要があるため、より探索的なfollowerを含む構成が有効であったと考えられる。

次に、KLダイバージェンスによる探索戦略の多様化の有効性を検証した。結果を表2に示す。提案手法(Proposed)は表1の最良条件を用い、最良条件での係数の平均値を全followerに対する係数とした場合(Averaged coefficient)と比較した。その結果、両タスクでProposedの方が高い報酬値を示し、各followerに異なるKLダイバージェンスに対する係数を与えることの有効性が示唆された。

表1 各タスクのスコア

	タスク	
	Regrasping	Reorientation
SAPG	25866.9±1706.9	6658.0±3670.7
KL_0.001	28619.9±1294.6	5023.6±1846.0
KL_0.1	26927.4±2456.2	8134.0±4277.7
KL_1.0	28634.7±2983.8	9669.0±4375.6

表2 follower間の探索多様性の有無による性能比較

	タスク	
	Regrasping	Reorientation
Proposed	28619.9±1294.6	9669.0±4375.6
Averaged coefficient	21858.2±3053.8	8297.6±3228.8

4. まとめ

本研究では、SAPGにおけるfollower間の方策多様性に着目し、KLダイバージェンスを用いてfollowerごとの方策更新の変化量に差を与える手法を提案した。シミュレーションより、followerごとの探索特性を調整することで学習性能が向上することを確認した。今後は、学習状況に応じてKL係数を自動調整する適応的な多様性制御手法の検討を行う

5. 参考文献

[1] J. Singla, A. et al. “Split and Aggregate Policy Gradients” Proceedings of the International Conference on Machine Learning (ICML), 2024.

学籍番号	220442148	氏 名	横山 麗王	指導教員名	内田 儀一郎
題 目	基板温度による SiSn ナノワイヤー負極の構造制御と Li イオン電池応用				
Title	Structure control of SiSn nanowires by changing substrate temperature for Li-ion battery anode				

1. まえがき

Liイオン電池は、高エネルギー密度・長寿命・軽量・小型といった特徴から幅広い分野で使用されている。従来のLiイオン電池は負極材料として炭素が使用されているが、理論容量が低いため、新たな負極材料の開発が進められている。本研究では炭素の11倍以上の理論容量を持つシリコン(Si)を負極材料に用いることで容量の向上を目指した^[1]。

しかし、Siは充放電時に体積が膨張し、集電体からSiが剥離することで容量が低くなるという特徴がある。そこで、本研究ではSiをナノワイヤー構造にすることによって隙間を作り、体積膨張の影響を緩和し耐久性の向上を目指した^[2]。

本研究の目的は、スパッタリング法を用いることでSiナノワイヤーの構造を制御し、そのSiナノワイヤーをLiイオン電池に用いることで高容量・高耐久なLiイオン電池を作製することである。

2. 実験方法

本研究ではRFマグネトロンスパッタリング装置を用いて直径15[μm]の銅基板上にSiナノワイヤーを作製した。スパッタリングターゲットにはSiSn(94:6at%)を使用し、成膜時の基板温度を50、100、300、400、500[°C]と変化させて成膜を行った。また、ガスシャワーを用いることでチャンバー内のHeガスの流れを変えて成膜を行った。その後、成膜したSiSnナノワイヤーを用いてLiイオン電池を作製した。評価方法としては、SEM・EDXを用いた膜の形態・物性評価、定電流充放電試験による電池の容量サイクル特性評価を行った。

3. 実験結果と考察

図1に、充放電サイクル特性結果の良かった条件である、ガスシャワーなしで基板温度50[°C]、ガスシャワーありで基板温度100[°C]の条件で成膜をしたSiSnナノワイヤーの表面・断面のSEM像を示す。図2には、図1に示したSiSnナノワイヤーを負極に用いたLiイオン電池の充放電サイクル特性結果を示す。

ガスシャワーなしで基板温度50[°C](●)の条件は最大放電容量1690[mAh/g]を示した。また、200サイクル後の放電容量は1060[mAh/g]で容量維持率は

84.5%と非常に高い値であった。容量維持率が良かった要因としては、ナノワイヤーが基板から垂直に成長しているため、体積膨張の影響をより緩和できたからではないかと考えられる。

ガスシャワーありで基板温度100[°C](■)の条件は最大放電容量2016[mAh/g]を示した。しかし、200サイクル後の放電容量は299[mAh/g]で容量維持率は19.8%であった。初期放電容量が高くなった要因としては、この条件で成膜したナノワイヤーは直径が59.1[nm]と他の条件に比べて小さいため、ナノワイヤーの表面積が大きく、Liと反応する面積が増えたためだと考えられる。

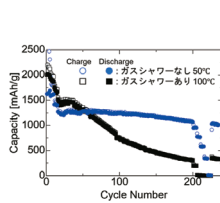


図1 成膜したSiSnナノワイヤーのSEM像

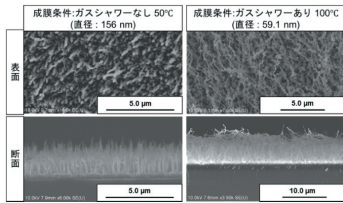


図2 Liイオン電池の充放電サイクル特性結果

4. まとめ

本研究ではスパッタリング法を用いてLiイオン電池用SiSnナノワイヤー負極の構造制御を行った。電池容量では、ガスシャワーありで基板温度100[°C]の条件で最大放電容量2016[mAh/g]を観測した。電池耐久性では、ガスシャワーなしで基板温度50[°C]の条件で200サイクル後の放電容量1060[mAh/g]を実証した。

5. 参考文献

[1] Kang, Kibum, et al. Applied Physics Letters 96.5 (2010).
[2] Chan, Candace K, et al. Nature nanotechnology 3.1 (2008): 31-35

i お知らせとご案内

電気会の活動を今後も円滑に進めていくため、以下について皆さまのご協力をお願いいたします。

秋季懇談会のご案内

「第 4 回電気会秋季懇談会」(新春懇談会を含む通算第 29 回)は、2026 年 10 月下旬の土曜日午後の開催を予定しております。詳細が決定次第、電気会ウェブサイトにてご案内いたします。多数の会員の皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

会員情報(メールアドレス)登録・更新のお願い



メールアドレスが未登録、またはメールが未達となっている会員の方がいらっしゃると思います。

この機会に、電気会ウェブサイトの会員情報変更申請ページ (<https://www.meijo-denikikai.jp/form/>、または右記 QR コードより、メールアドレスの登録・更新にご協力ください

いますようお願いいたします。卒業生の皆さまへ：卒業生メールアドレスのサービスが終了します。2008 年以降の卒業生の皆さまにご利用いただいている ccalumni アドレスのサービスは 2027 年 3 月末をもって終了いたします。引き続き同窓会からの案内をお届けするため、下記ページをご確認の上、連絡先の更新にご協力をお願いいたします。



会誌送付について

電気会会誌は、電気会ウェブサイトから PDF 形式でダウンロードいただけます。

紙面での送付を希望される方は、以下のリンクまたは右記 QR コードから表示される申込フォームに必要事項をご入力の上、お申し込みください。<https://forms.gle/zWLkvJn2zcuGYCVw8>



役員・評議員の募集

電気会では、会運営を執行する役員および運営評価を担う評議員を募集しています。評議員は毎事業年度終了後に開催される評議員会にて事業運営評価に携わって頂きます。ご希望の方は、電気会事務局 (jimukyoku@meijo-denikikai.jp) まで、お名前・卒業年をご記載のうえお申し込みください。

賛助会員の募集

電気会では、賛助会員を募集しています。年会費は 1 万円です。

賛助会員の皆様には、電気会ウェブサイト (URL : <http://meijo-denikikai.jp>) への企業広告掲載を行っております。

賛助会員とは、電気会の目的にご賛同いただき、その事業を支援していただく個人または団体で、役員会の承認を得た方を指します。

お申し込みは、電気会事務局メールアドレス (jimukyoku@meijo-denikikai.jp) 宛に、貴社 (団体) 名およびご担当者名等をご記載のうえご連絡ください。

今後とも名城大学電気会へのご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

名城大学電気会会誌 第 56 号

発行日 2026 年 8 月 1 日

発行者 名城大学電気会

所在地 〒468-8502

名古屋市天白区塩釜口一丁目 501 番地

名城大学理工学部電気電子工学科内

電話 (052)832-1151

版・刷 初版・第 1 刷。

誌掲載内容の無断転載・複写・複製を禁じます。